

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20800043
 研究課題名（和文） 大卒者の労働への適応に対する課外活動経験の効果
 研究課題名（英文） The Effect of Extracurricular Activity Experience for Graduates' Adaptation to Work
 研究代表者
 東原 文郎（TSUKAHARA FUMIO）
 札幌大学・文化学部・講師
 研究者番号：50453246

研究成果の概要（和文）：本研究は 2 つのパートに分けられた。一つは課外活動経験が就職に有利となるという観念の一例として「体育会系」に注目し、わが国においてこうした考え方が①大正初期から昭和初期にかけ、②日本企業が広報と離職防止の意図をもってスポーツ振興を進めた結果台頭したこと、また③慢性的な不景気から労働運動が激烈を極める時期にあって、左翼思想への警戒、すなわち思想穏健の代表として出現したことを、当時のビジネス雑誌『実業之日本』の記事を分析して明らかにした。

もう一つは、私立大学卒業生へのアンケート調査から、課外活動経験が現在の職場ならびに転職回数にいかなる影響を及ぼすかを検証した。結果、学校組織内の運動・スポーツ活動に参加したもの（体育会系）は、年収や初職在職期間において他に上回る傾向があることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study has two parts. First focuses an idea "Athletes" as an example that being them functions employment better and easier. With analyzing the articles of business magazine, "Jitsugyou no Nihon", at that time, revealed that: (1) this concept has its origin during the early Taisho and the early Showa period,(2) because private corporations rise to promotion of sports with the intention of preventing leaving company and of public relations. More, (3) in the era, when there were frequent intense labor movement caused from chronic depression, it became ripe as a warning to leftist ideology, or represent of the moderates.

Second, with a survey for graduates from a certain private university in Hokkaido, it was examined that the extracurricular activity experience effects for graduates' adaptation to work. The result showed that those who participated in college sports activities ("Athletes") tend to gain more income and longer period of one's 1st job.

交付決定額

(金額単位：円)

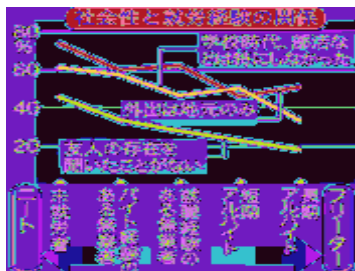
	直接経費	間接経費	合計
2008年度	790,000	237,000	1,027,000
2009年度	840,000	252,000	1,092,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,630,000	489,000	2,119,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：課外活動，大卒者，就職，労働への適応，大学教育，体育会系，教育効果

1. 研究開始当初の背景



[図1：社会性と就労経験（読売）]

大学全入時代への移行と企業内教育の崩壊は、大卒者のキャリア形成を社会問題として浮上させた。とりわけフリーターやニート、第二新卒としてラベリングされた未就労と早期離職現象は、学卒の労働への不適応が問題化しているものと理解できる。これらの増加は、将来にわたる「社会的コスト」増大の観点から、我が国ばかりでなく先進諸国において早急に対処すべき課題と位置づけられている [小杉ら 2005；OECD 2000]。

こうした労働への不適応の原因として、「若者のコミュニケーション能力の欠如」、「社会的ネットワーク・組織への適応不全」を挙げる論者は多い [玄田・曲沼 2004；小杉 2005；山田 2004 など]。読売新聞も、大規模な WEB 調査の結果から、労働への適応と社会性と関連付けて紹介した [図1：2006/5/26 朝刊]。上記論者の研究知見を支持する一般的な感覚の表れと解釈できるが、ここで重要なのは、調査設計者が社会性を育む社会システムとして課外活動を暗黙に想定している点である。

課外活動といえば一般に学生が学内で行う運動・スポーツおよび文化的諸活動と定義できるが、こと運動・スポーツ部活動については、体育・スポーツ社会学のスポーツ社会化論という理論文脈のなかで、社会性を育むシステムとして積極的に論じられてきた。だが、学校への適応について一定の研究蓄積を残したものの、労働への適応に対しては直接

的に検証された形跡がない。

他方、労働への適応については労働経済学の分野で研究蓄積があるが [太田 1999；黒澤・玄田 2001]，大学教育，わけても大学の課外活動との関連から実証的になされた議論は限定される。学卒者の労働適応を促進する課外活動のあり方を検討するためには不十分なのである。

なぜなら、課外活動の内容とコミットメントの程度について、詳細に把握できないからである。ひとくちに課外活動といっても千差万別であり、具体的に何にどれくらいコミットしたのか、それによってどのような利点が生じ、労働への適応にいかなる作用を及ぼしたか、先行研究からは見えてこない。

2. 研究の目的

そこで、課外活動経験が就職や労働への適応に貢献するのか、この問いに答えるべく、本研究は2つのパートに分けられた。

第一に、(1)「体育会系」なる観念に注目し、わが国においてこうした考え方がいつから、どのような背景の中で発生し、醸成されてきたのかを明らかにする。

第二に、(2)現代の大卒者における在学中の課外活動の内容とコミットメントの程度についての詳細を把握し、それらが卒業後の労働への適応にいかなる影響を及ぼすかを考察する。

なお、本研究では当初ハローワーク職員へのヒアリング調査及びアンケート調査を予定していたが、未曾有の経済危機に直面したため、多忙を極める同所職員への調査を断念した。

3. 研究の方法

(1)本パートでは、「学校制度に組み込まれた運動・スポーツ系クラブ(部)活動に組織的・継続的に参加した学生」を<体育会系>と定義した。「体育会系」という言葉自体の起

源や普及については、管見の限り明らかになってはいない。だが、運動・スポーツに深く関わる学生をこのように定義することで、時代にとらわれずにその他の学生と区別し、比較し、差異を述べるができるようになる。

また、同様の理由で、<体育会系>が就職の際に他に比して有利な立場をとり得るという通俗的な認識・観念を、<体育会系就職>として定義した。

以上の分析概念を用い、わが国にスポーツが伝来した明治末期から昭和初期にかけてのビジネス雑誌『実業之日本』の記事を分析した。

(2) 道内私大（文系）の卒業生を対象に、在学中の課外活動経験と入職、現職についてのアンケート調査を実施した。配布 2,485, 回収 323, 回収率 13.0%（有効票は分析により異なる）であった。

課外活動の効果が析出されやすくなるよう、大学公認学生組織において運動・スポーツ活動に従事した学生を<体育会系>として抽出し、他との比較を実施した。

4. 研究成果

(1) 大正初期、まだ<体育会系>への明確な気づきはなく、社会の競争に生き残るためには強壮なる身体を持ち合わせるべきだという信念のみが存在した。大正中期、各会社の重役に<体育会系>が多いことが認識されるようになり、<体育会系就職>の萌芽がみられるようになる。そこには、実業界を席捲しつつあった「体育熱」の高まりを背景とし、① 広告と② 遠隔地における離職防止という2つのメディアバリューが明確に意識されるようになる過程が存在していた。大正末期になると、<体育会系就職>は確立される。<体育会系>ビジネスマンの活躍への気づきとともに、学力偏重採用への反省が背景を成した。

昭和初期にはそれまでと異なる展開があった。<体育会系就職>における「プロ/アマ」の区別が明確になり、アマチュア的要素が優位に序列づけられる中で、改めて公正高潔な精神性であるところのスポーツマンシップが有用な身体を構成する要素として浮上する。折しも慢性的な不景気から労働運動が激烈を極める時期にあつて、マルクス主義、左

傾、赤への警戒、すなわち思想問題が社会的に取り沙汰されるようになっていた。こうした文脈の中で、身体的にも精神的にも問題を抱える<教養系>がマイナスイメージを一手に引き受け企業から忌避されたものと考えられた。同時に、<体育会系>は何の変化もなかったがために「思想穏健」のメルクマールと認識され、採用上ますます重要な視点として了解されるに至ったのである（表 1）。

[表 1: 昭和初期の人材イメージ]

	項目	有用な身体	非-有用な身体
身体性	スポーツ	する, できる	しない, できない, 野蛮として退ける
	身体	強壯, 剛健, 体格よし	柔弱, 虚弱, 貧相
精神性	健康	良好, 体力あり	結核, 花柳病, 栄養不良, 等
	精神	堅実, 正常	神経衰弱, 煩悶, 神経質, 変態心理
社会性	性格	颯爽として快活, 社交的, 公正	陰鬱, 自棄的, 妙にひねる, 理屈っぽい, 姑息
	学業成績	悪くない, 良すぎない	良すぎる, 勉強のし過ぎ
社会性	思想	穏健, 堅実, 健全	過激思想, 危険思想, 左傾, マルクス主義
	交友関係	広い	狭い
社会性	実務	できる	できない
	結果イメージ	<体育会系>	<教養系>

(2) 対象者の属性は表 2, 3 の通りである。

[表 2: 学部 × 性別]

		男	女	合計
学部	経済	73	17	90
	経営	70	25	95
	法	44	7	51
	外国語	17	32	49
	文化	16	17	33
	不明	1	2	3
合計		221	100	321

[表 3: 体育会系/非体育会系 × 入職時期 × 性別]

			男	女	合計
非体育会系	入職時期	90年代前半	40	12	52
		90年代後半	34	16	50
		00年代前半	20	24	44
		00年代後半	28	12	40
		合計	122	64	186
体育会系	入職時期	90年代前半	38	5	43
		90年代後半	16	6	22
		00年代前半	12	6	18
		00年代後半	15	10	25
		合計	81	27	108

ここで注意すべきなのは、回答傾向として 90 年代前半に入職時期を迎えた人が多く含まれていることである。年齢は、新卒時の採用環境の他、年収、在職期間等に大きく影響してしまう変数となる。従って、以下の知見

はそうした留保をつけて解釈しなければならない。

体育会系と非体育会系において差異が存在すると考えられる項目について、平均値の比較(t検定)を行った(表4, 5)。

[表4: 体育会系/非体育会系の平均値比較]

		N	平均値	標準偏差
「A」の比率	非体育会系	141	49.75	25.89
	体育会系	70	41.59	25.33
修得単位数	非体育会系	117	140.15	36.81
	体育会系	67	142.85	34.30
資格の数	非体育会系	97	1.26	1.14
	体育会系	61	1.10	1.23
ロールモデルとの出会い	非体育会系	168	2.55	0.89
	体育会系	114	2.30	0.85
大学での受賞歴	非体育会系	204	0.15	0.36
	体育会系	119	0.63	0.48
初職志望順位	非体育会系	182	2.17	1.29
	体育会系	104	1.77	1.12
初職就活満足度	非体育会系	183	2.40	1.07
	体育会系	100	2.25	0.95
勤務社数	非体育会系	99	2.92	1.38
	体育会系	58	2.43	1.16
初職在職期間	非体育会系	96	2.80	2.65
	体育会系	55	4.65	4.46
年収	非体育会系	189	4.89	2.37
	体育会系	110	5.71	2.19
中3の時家庭は教育熱心	非体育会系	197	2.45	0.85
	体育会系	112	2.43	0.94
中3の時家庭は裕福	非体育会系	194	2.33	0.75
	体育会系	112	2.28	0.67
家計支持者の最終学歴	非体育会系	198	3.03	1.51
	体育会系	111	2.95	1.51

[表5: 体育会系/非体育会系と各項目のt検定]

	t 値	有意確率(両側)	平均値の差
「A」の比率	2.171	0.031	8.160
修得単位数	-0.492	0.624	-2.705
資格の数	0.829	0.408	0.159
ロールモデルとの出会い	2.354	0.019	0.249
大学での受賞歴	-9.489	0.000	-0.483
初職就活満足度	1.208	0.228	0.149
初職志望順位	2.758	0.006	0.401
初職在職期間	-2.810	0.006	-1.854
勤務社数	2.264	0.025	0.488
年収	-2.972	0.003	-0.820
中3の時家庭は教育熱心	0.174	0.862	0.018
中3の時家庭は裕福	0.618	0.537	0.053
家計支持者の最終学歴	0.393	0.695	0.070

その結果、以下のことが明らかとなった。

- ①体育会系は非体育会系に比べ、「A」の比率が有意に低い。
- ②体育会系が獲得する単位数は他と変わらない。
- ③取得する資格の数も他と大差ない。
- ④体育会系は人生を左右するようなロールモデルとの遭遇率が他に比して若干高い。
- ⑤体育会系は大学時代何らかの賞を経験

する可能性が他に比して有意に高い。

- ⑥入職時における就活の満足度は、体育会系の方が若干高い傾向がある。
- ⑦体育会系は、他に比して有意に新卒時の志望を叶えやすい。
- ⑧体育会系は、他に比して有意に勤務先を変えにくい。
- ⑨体育会系は、初職にとどまる期間が他に比して有意に長い。
- ⑩体育会系は、他に比して有意に多い年収を得る。
- ⑪体育会系の家庭環境は、教育熱心さや裕福さ、家計支持者の最終学歴において他と大差ない。

以上から、現象として、〈体育会系〉は成績が悪くても望ましい就職を叶えやすく、また、労働への適応を果たしていることが暫定的に示された。だが、先に述べたとおり、回答者の傾向として90年代前半に入職した世代が多く、確定的な知見として提示するにはさらに多変量解析の手続きを要する。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計1件)

東原文郎「体育会系の中から一企業が求めた有用な身体:『実業之日本』の記述を手がかりとして」. 寒川恒夫=編著『近代日本をつくったからだ』大修館書店, 掲載決定(近刊)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東原 文郎 (TSUKAHARA FUMIO)

札幌大学・文化学部・講師

研究者番号: 50453246